

第3回で発見した種石の清掃および矢穴拓本の採取、写真撮影、測量を行った。また、小瀬原地区における刻印石・矢穴石の位置を把握し、測量および拓本採取を行った。清掃により種石の下にもう一つ矢穴がある種石を発見した。ボランティア3名参加。福田地区の藤堂石丁場を視察した。

参加者一覧

橋詰茂・森下英治・大嶋和則・高田祐一・梶原慎司・松田朝由・小原一郎・坪佐利治・坪佐晴美・中西裕見子・大川大地・東信男・三好順也・三好真千・岡上峰康・岡本昂久・出口明澄・村瀬龍宇一・寺内広太佳・堀之内照幸・田山直樹・大西歩・中森玲香

(橋詰)

II. 豊島における大坂城石垣石丁場跡

元和6(1620)年から開始された大坂城築城にあたり、多くの大名がこぞって小豆島で石丁場を拓いたが、小堀政一による石丁場支配が強く及んでいた。そこで諸大名は、小堀に伺いをたてながら石丁場の確保に奔走するのであった。豊島の石丁場をめぐるでもその様子を知ることが出来る。豊島の石丁場は、文献に二カ所現れており、石丁場が拓かれていたことは知られていた。だが、その明確な所在地は不明というより、本格的な調査は行われていない。そこで豊島の石丁場を示す文献史料を検証し、石丁場跡の所在確認をはかった。史料によれば、肥前佐賀藩の鍋島勝茂が、小豆島に石丁場を所望する旨を小堀政一に申し入れたため、手島(豊島)内の家之浦(家浦)とかうの浦(甲生浦)の二カ所に石丁場を取ることにし、小堀は下代である長屋木工・大橋金左衛門と豊島庄屋に渡すよう命じた。小堀からの指示を受けて長屋・大橋は土庄村庄屋三郎左衛門に命じた。このことから、豊島に二カ所石丁場が存在したことが明らかである。史料は年未詳だが、元和7、8年と考えられる。大坂城第一期工事に合わせて石丁場の確保を図ったものである。

甲生地区には海岸線に二つに割れた巨石があり、そこには矢穴跡が残されている。地元では「われいし」と呼ばれ、早くからその存在は知られていた。この付近が文献に見る甲生石丁場と推定し、「われいし」を中心に調査を行った。船による海上からの海岸部と山間部の地形を確認をし、水中ドローンと空中ドローンを用いて矢穴石の分布調査を実施した。その結果、磯



写真1 甲生地区の「われいし」



写真2 甲崎地区で発見した矢穴石



第2図 豊島で発見した新たな石丁場跡 (S=1/50,000)

丁場の大まかな分布範囲を明らかにした。海岸部から海中に向かって石積があり、船への石材積載用に築かれたものと想定される。「われいし」の矢穴は10 cmを越える大きさで、比較的古い時期の矢穴と推定できる。また、海岸踏査により、近世～近代の矢穴石や近代の製品を確認した。この海岸の奥地の谷筋には、小さい矢穴が見られるコップ石がある。この山間部に石丁場が存在したといえよう。文献に記された甲生と比定できる。

一方、家浦丁場の所在地は明らかでなかったが、地元住民への聞き取りにより近代石丁場が甲崎地区にあったことが明らかになり、その周辺を空中ドローンにより撮影した。その結果、海岸部に近世初頭と考えられる矢穴石を確認した。文献に見る家浦は甲崎地区と比定できる可能性が高い。また、この二カ所以外にも空中ドローンにより小学校裏手の山間部に矢穴が確認されたが、近代の石丁場の可能性が高い。豊島での調査は今後の課題としたい。

(橋詰)

Ⅲ. 小瀬原石丁場における水中調査

小瀬原石丁場の海岸部では、2014～2018年の調査（徳島文理大学編2019）によって、石材密集地点が3カ所確認されている。それぞれA・B・C地点に区分しており、そのうちA地点の大型石材には矢穴を確認している。石材上部にある矢穴列は、幅10～12cm、厚さ4cm、深さ10cm前後である。

小瀬原石丁場の海岸部を調査することで、山間部の石丁場の場所を推定できることから、海